

經濟倫理の実存的限界

武 藤 光 朗 著

經濟哲学

Ⅱ



創 文 社

武藤 光朗 (むとう・みつろう)

大正3年生れ、東京商科大学卒業、現在早稲田大学講師。
主著・『マックス・ウェーバーの人間像』『経済倫理』(以上春秋社)、『社会主義と実存哲学』、『現代日本の革命と反抗』『現代日本の精神状況』『経済学史の哲学』(以上創文社)他。訳書・ヤスパース『哲学的世界定位—哲学Ⅰ』(創文社)他。

〔経済倫理の実存的限界〕

昭和四十六年十月二十日 昭和四十八年四月十五日 第一刷印刷 第二刷発行	著者 武藤 光朗	発行者 久保井理津男	印刷者 中内 佐光	東京都文京区関口一ノ二四ノ八	発行所 一 東京都千代田区 一番町一七番地	株式会社 創文社 電話 (283) 七二〇一(代表) 振替 東京 九二四七二 郵便 番号 一〇二
--	-------------	---------------	--------------	----------------	-----------------------------	--

(落丁・乱丁の節はお取替いたします)

暁印刷・橋本製本

1010-100510-4226

第二卷への序文

経済哲学は、私たちが自己存在に確信をもって生きてゆくための根拠を求める哲学的思索が経済生活に即して分節化したものであり、それはおよそ次のような道程で展開される。

まず、迷信、政治的煽動、教義的独断などのあいまいなヴェールを取除き、私たちの経済生活の現実態を客観的对象的に認識する科学としての経済学の認識成果を通路としなければならない。しかし科学としての経済学の認識過程は無際限であり、具体的状況の中で私たちが自己存在としていかに生きるべきかの根拠は、そこからは出てこない。経済哲学は、科学としての経済学の歴史を反省し、そこに現われてくるさまざまな視点、方法を明晰な自覚にもたらすことによって、経済学の諸限界を暴露し、その限界のもとにはたらきかけている諸々のイデーを通じて、研究者としての経済学者たちを歴史的に背後からうごかしてきた彼らの精神との交わりの中に入つてゆかなければならない。

こうした「経済哲学的世界定位」が本書の第一巻『経済学史の哲学』の課題であった。

次に経済哲学は、経済学の歴史にはたらきかけてきたさまざまなイデーに耳を傾けながら、私たちが歴史的に投げこまれている眼前の経済生活の具体的状況の中で、自己存在としていかに生きるべきかの根拠を探索しなければならぬ。私たちが投げこまれているこの歴史的状況の狭さを自己の限界状況として決意的に引受けようとするとき、その限界状況の狭さを形づくる壁はどのような具体的な姿をとって迫ってくるか、これに対して私たちはどのように対決しようとするのか、その決意の根拠をどこに求めたらよいか、またその決意はどのような構

造をもつか。……

こうした問いに答える「経済哲学の実存開明」が、この第二巻『経済倫理の実存的限界』の課題である。

最後に、「経済哲学の実存開明」を通じて開明された決意にもとづいて、歴史的に出会われる経済生活の現実態のうちに私たちの人生を意味づける実存的示唆を読み取ってゆく「経済の形而上学」が、本書の残された課題となる。

第一巻『経済学史の哲学』では、経済学の世界の歴史的展開の過程を通じて、その世界の限界のもとで、次のようなさまざまなイデオロギイがはたらきかけてきたことを明らかにした。

(1) 十六、七世紀西ヨーロッパの禁欲のプロテスタンティズムの職業倫理をみちびく「裁きの神」が、「諸国民の富」を念ずる「見えざる手」として感受されるようになり、その「見えざる手」が機能する力学的な場としての市民社会の経済的メカニズムの運動を微分的に構成しようとしたところに、イギリス古典派経済学の世界像が成立した。

(2) その古典派経済学の世界像の中で人間的に疎外されるようになった非市民的プロレタリアの階級的立場に自己を投企し、そこからこの世界の限界を暴露しようとしたところに、マルクス経済学の世界像が形成された。

(3) これに対して、イギリスにくらべて市民社会の発達のおくれたドイツ国民の経済的運命に視点をおいて、イギリス古典派経済学の世界像の限界を指摘しようとしたのが、ドイツ歴史派経済学であった。

(4) 十九世紀の七十年代における主観的価値論の提唱は、巨大複雑化して運命形態化した市民社会の経済的メカニズムの力学的運動の中に自己を機能化される不安を感じるようになった市民的個人が、自らの生活体験のう

ちに擱まれた主体的確実性にもとづいて、このメカニズムを理論的に再構成しようとする要請に由来するものだった。

(5) バレート以来の近代経済理論の純粋化は、主観的価値論の基点となった評価個人の主体的確実性の非合理的根源を経済理論から切りはなすことによって、経済理論の普遍妥当性を獲得しようとした。しかし主体的確実性から切りはなされた経済理論は、その確実性の根拠を、経済社会の経験的現実態における諸事実の客体的確実性への接近に求めて、経済理論の動態化に努めることになったが、経済理論の動態化のためには、時間の要素、したがってまた経済行為する人間の不安の心理を、経済理論の中に導入しなければならなかった。そこに、一切の社会的価値理念の客観性を拒否する現代の大衆社会の単独者の価値感情が、経済学的世界の限界のもとにはたきかけてくることになった。ケインズの「一般理論」はその顕著な例証である。

こうして、イギリス古典派経済学が描いた市民社会の経済的メカニズムの限界を暴露し、それを乗り越えようとする企てが、非市民的プロレタリアの階級的自己疎外感や後進国民の被圧迫感や大衆社会的単独者の不安をモティーフとして、経済学の世界にも現われてきた。階級、国民、単独者が、それぞれ市民社会の経済的メカニズムの限界を越えようとする主体的企てのイデオを尖端として、そのメカニズムを限界状況として生きる私たちに訴えかけてくるのである。

この第二巻『経済倫理の実存的限界』は、これらのイデオの訴えかけが私たちの自己存在に対してどのような実存的示唆を投げかけているか、これに対して私たちは何を抛りどころとして態度決定をしたらよいか、その決意の根拠と構造を探索することを課題としている。

その探索の道程はおよそ次のようである。

(1) 近代市民社会の経済的メカニズムの運動過程で、零^ろ価値としての貨幣が自己目的として実体化されるにつれてそのメカニズムが運命形態化し、その不条理のもとで自己存在を疎外された人間が、その自己存在を「革命的プロレタリアの協同体」による「計画経済」のうちに取りもとそうとするようになる。しかしそれは幻想であつて、その主體的な企ては新しい国家官僚制の「隷従の殻」を呼び起こす。

(2) これを避けようとして、「経済的自由」に身をまかせて行けば「大企業体制」の支配のもとで私たちの自己存在が麻痺されてゆく。

(3) 私たちの自己存在を生かしながら、運命形態化した経済的メカニズムの不条理に反抗しようとするれば、「ベルソナの倫理」にもとづく「仕事協同体」としての福祉国家に連帯するほかはないが、その福祉国家にも実存的限界がつきまとう。これを「エロスの秩序」としてユートピア化しようとしても、その実存的限界はあくまで残る。

(4) 北の工業諸国ではこうした福祉国家の実存的限界がまさに問われているが、南の新興諸国では、むしろ近代市民社会の経済的メカニズムを作り出す主体を超個人的全体としての「国民」に求める強い誘惑にさらされている。そういう状況の中で人間がどうすれば自己存在として生きてゆくことができるかということが、経済哲学に対する挑戦的課題となっている。

(5) このような歴史的状況の中で、日本人の精神的伝承が現代の経済倫理に示唆するものはなにか。……

この第二巻には、はじめの予定では旧著『経済倫理——経済学と世界観——』（昭和30年春秋社刊）を加筆して充當するつもりだったが、書いていくうちに、旧著の一部を材料として使ったほかは（たとえば「計画経済の論

理と倫理」の部分)、全く新しい書物になってしまった。考えてみれば、旧著を公けにしてから十五年余の歳月が流れ去ったのだから、そうなるのは当然であらう。もっとも、この巻で展開した基本観念のいくつか(たとえば「貨幣の形而上学的意味」についての私見)は、昭和二十二年に公けにした旧著『経済哲学——資本主義の限界の問題』(夏目書店刊)以来のものである。また左右田哲学における単独者としての「創造者価値」の思想への関心は、昭和十三年の旧稿「左右田と経済哲学」(杉村広蔵著『経済哲学通論』理想社刊に収録)以来のものであり、本巻第九章「社会主義と左右田哲学」は昭和三十三年初版の『社会主義と実存哲学』(創文社刊)の巻末に補論として附け加えたものを、本巻の体系的脈絡の中に再録したものである。

そのほか第十章「工業化とアジアの価値体系」は現代アジア社会思想研究会編『アジア社会の近代化と価値体系』(昭和四十一年嶋崎経済研究所刊)に、第十一章「未来社会と《道》の倫理」は、『経済論壇』昭和四十五年六月号にそれぞれ掲載したものの再録であり、また巻末の「第二巻への結論的覚書」は、同年十月の「社会思想研究会」月例研究会でおこなった講演の速記録(同会機関紙『社会思想研究』第二十三巻第一号に掲載)の再録である。

*

第一巻を公けにしてからでもすでに二年が経過している。過去十数年を通じて終始そうだったように、この二年間もこの仕事を見守り、励ましてくれた久保井理津男氏はじめ創文社の方々、特に本巻に尽力していただいた石川光俊、久保井浩俊両氏に、この機会に感謝の意を表したい。巻末の索引表は浩俊氏を煩わしたものである。

昭和四十六年七月

武藤 光朗

目次

第二卷への序文

第一章 貨幣の哲学……………三

1 ゆたかさの中の不安……………三

2 経済哲学の基本的モチーフ……………七

3 貨幣——この没個性的な形象……………一一

4 貨幣の形而上学的意味……………一五

5 零価値としての貨幣……………一八

6 貨幣と禁欲……………二四

第二章 資本の逆説……………二九

1 貨幣のテレオロギ……………二九

2 「誘惑」としての貨幣……………三三

3 人間性の「自然の事態」……………三六

第三章 疎外される労働者……………四一

1	シジフォスの運命……………	四一
---	---------------	----

2	労働の重荷と「理性の狡智」……………	四五
---	--------------------	----

3	近代資本主義の労働倫理……………	四八
---	------------------	----

4	革命の予言と歴史のアイロニー……………	五三
---	---------------------	----

第四章	計画経済への幻想……………	五七
-----	---------------	----

1	「疎外」と「搾取」……………	五七
---	----------------	----

2	「革命的プロレタリアの協同体」……………	六一
---	----------------------	----

3	計画経済の論理と倫理……………	六四
---	-----------------	----

4	「他律」の倫理のもとでの経営と労働……………	六八
---	------------------------	----

5	「官僚制化」の運命……………	七三
---	----------------	----

第五章	経済的自由の限界……………	八一
-----	---------------	----

1	個人主義的価値前提……………	八一
---	----------------	----

2	「科学的管理法」の論理……………	八九
---	------------------	----

3	大企業体制……………	九三
---	------------	----

4	国家の役割——生活の審美的次元と社会福祉的サービス——……………	一〇〇
---	----------------------------------	-----

5	政治的意志決定過程を導くもの——「科学的エリート」の限界——……………	一〇三
---	-------------------------------------	-----

6	ヒューマン・リレーションズと労働者の反抗……………	一一〇
---	---------------------------	-----

7	反抗の哲学……………	二七
第六章	福祉国家……………	一五
1	福祉国家の理念型……………	一五
2	価値体系の中心としての「社会的福祉」……………	一八
3	福祉国家の倫理——社会功利主義と理想主義の総合——……………	二三
4	「仕事協同体」としての福祉国家……………	四三
第七章	ペルソナの倫理……………	五二
1	ペルソナとしての人格……………	五二
2	運命とペルソナ……………	五三
3	ペルソナと実存……………	五五
4	ペルソナとリビドー……………	五九
5	エロスの秩序とペルソナの倫理……………	六三
第八章	ユートピアの限界……………	七七
1	福祉国家の実存的限界……………	七七
2	単独者の世界……………	八五
第九章	社会主義と左右田哲学……………	一五

1	協同体と社会……………	一六
2	文化目的と人間目的……………	二〇〇
3	社会主義と個人の自由……………	二〇八
第十章	工業化とアジアの価値体系……………	二二五
1	工業化と価値体系……………	二二五
2	伝統主義的価値体系を破る力——カリスマと官僚制化——……………	二二七
3	工業化とアジアの宗教倫理——中国とインドの場合——……………	二三〇
4	アジアにおける共産主義と政治的自由……………	二三四
第十一章	未来社会と「道」の倫理……………	二三三
1	「新しい価値、新しい人間」について……………	二三三
2	GNP信仰と「幸福指標」……………	二三四
3	ヒッピーの論理と未来学——幻覚と創造的想像力——……………	二三七
4	システム化と「道」の倫理……………	二四〇
	第二巻への結論的覚書……………	二四三
索引……………		一 13

經濟倫理の実存的限界―經濟哲学Ⅱ―

第一章 貨幣の哲学

1 ゆたかさの中の不安

二十世紀の後半、世界の北の工業諸国が永年夢みてきた「ゆたかな社会」に足を踏み入れかけた時、その社会を基本的に秩序づける計算的悟性に対する大衆の反抗が、しばしばデカダンスや暴力的破壊衝動や南の未開へのロマンティズムをともなうて出現したのはどうしたことだろうか。完全雇用が確保され、所得水準が向上し、社会保障が充実して、史上はじめて経済的福祉が大衆のものになりそうな「ゆたかな社会」になっても、その大衆は所詮は人間存在に本来的につきまとう不安から逃れることはできないのではないだろうか。

「今日、究極の、もっとも崇高な諸々の価値は、すべて公の舞台から引き退き、あるいは神秘的生活の隠れた世界の内に、あるいは人々の直接の交わりにおける人間愛の中に、その姿を没し去っている。これはわれわれの時代、すなわち合理化と主知化、とりわけ呪術からの世界解放を特徴とする時代の宿命である。」

マックス・ウェーバーは、第一次世界大戦直後の混乱の中で、来たるべき「ゆたかな社会」における人間の自己疎外を予告するかのよう(1)に、こう語った。

ウェーバーが見抜いた「時代の宿命」は、彼の死後、新しい不気味な展開を示した。世界を呪術から解放する

ことによって合理的な近代社会をつくりだした計算的悟性が、その機能をますます昂進させ、人間存在を幽閉する巨大な大衆的装置を随所に出現させるようになったのである。

すでに第二次世界大戦に先立ってカール・ヤスパースは「大衆の支配」が決定的になった時代に生きていると感じ、そこでは「個人が巨大な大衆的装置の中の一機能に解消され、人間存在は普遍的なものに還元されてしまっている」ことに警告している。⁽²⁾ それ以来ヤスパースは、このように大衆的装置の中で機能化されて単独の個人としてはどうでもよいものになってしまっている現代人が、どうすれば真実存在（実存）としての自己を取りもどすことができるか、ということを終生問いつづけたが、第二次大戦後の高度工業社会化の波の高揚の中で、その問いはいっそう切実なものとなっている。彼は、第二次大戦後の「経済の奇蹟」を実現したドイツの精神状況について次のように問うているが、そう問わなければならないのはドイツ人だけではあるまい。――

「連邦共和国の国民は、稀にしか話題にされない落伍者を例外として、これまでにないほど経済的に繁栄している。たえず短縮されてゆく労働時間、ますますふえてゆく消費財や旅行のチャンスや娯楽のもとで生活を享受しようとする熱望のうちに、ある種の満足感が支配している。それにもかかわらず、そこには不安がある。この生活は果して安全なのか。考える人たちは、憂慮の念をもって政治の現実を見つめる。われわれはどこに駆り立てられてゆくのか。⁽³⁾」

その「考える人たち」の一人として、たとえば現代の「新左翼」の思想家ヘルベルト・マルクーゼは、今日の高度工業化された「ゆたかな社会」では人間存在が計算的悟性によって限なく管理され、操作されていると見てこれに対する「全^{トータル}的な否定」が言われるべきことを強調している。――

「プロテスタンティズムと市民革命は思想の自由と良心の自由を宣言した。それらは、矛盾の、しばしば唯一

の、裁可された形式であり、希望の貴重な避難所であった。市民社会は稀にしか、また例外的な状態のもどし
か、この避難所に手を触れることを敢えてしなかった。……社会がこの領域内に侵入することは、常態では必要
でなかった。諸個人を全的に編成することは求められてはいなかった。」というのは、市民社会の生産力は、知
的欲求をふくめたあらゆる欲求を市場に向けて体系的に組織化しなければならないような段階に、まだ達して
おらず、人間の心と精神を管理するだけの洗練された手段も、そこには備わってはいなかったからである。人間の
心や精神を管理するためには、その管理そのものの名を汚すような恐怖政治的暴力を使うしか他に手段がなかつたのである。

しかし今日では事情が変ってしまった、とマルクーゼはいう。——「今では、そういう全的な管理の必要があり、そのための手段も用意されている。——大衆的な欲求満足、市場調査、産業心理学、《コンピュータ数学》、そしていわゆる《ヒューマン・リレーションズの科学》が、恐怖政治的でなく、民主的で自発的・自動的な仕方
で、個人的な欲求と社会的に必要な欲求、自律と他律を、調和させようと配慮している。」⁽⁴⁾こうして今日の高度工業社会では、「精神が、異なった光をあてて眺め、異なった概念で理解し、禁じられたイメージや可能性を発見するアルキメデスの点を、《既成体制》の外側に見いだしうる私生活 (Privacy) と自律の空間は消滅してしま
った。」——マルクーゼはこう診断している。⁽⁵⁾

マルクーゼのいう「一次元の人間」(One-Dimensional Man) は、このようにしてその最も内面的な「私生活と
自律の空間」までも計算的悟性によって管理され、操作されている現代の「ゆたかな社会」の大衆的な人間であ
る。

マルクーゼは、こうした計算的悟性の全面的な支配に対して、「人間存在の生物学的次元」としてのフロイト